

寺報 善 巧

発行

〒938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山497
白雪山 善 巧 寺
☎宇奈月(07656)(5)-0055

一月十三日より十六日まで
御正忌報恩講
布教 白山若院

寺
ごよみ

一月

一日 元旦会 明けましておめでとうございます。今年もよろしく願いたします。

三日 うらやま日曜学校
新年カルタ取大会

四日 栗虫・御助成

五日 栗虫・報恩講

九日 御正忌報恩講

一三日 午後二時より連夜

一四日 午後二時より連夜

一五日 午前十時より子供と青壮年の集い

十一時半 下村講

午後二時より連夜

午後七時より初夜

一六日 午前八時より晨朝

十一時半 栃屋・熊野・

浦山講

午後一時より満座

一八日

浦山・報恩講

三十一日

浦山・報恩講



大ろうそくに映える親鸞聖人真向きの御影

一月十六日は親鸞聖人の御命日です。日本全国の本派のお寺では、此の日を中心に、宗祖の徳を讃嘆する法要が営まれます。善巧寺では午後一時からの満座法要に、住職は、七條をつけて、登高座して巻物を読み上げます。巻物と云いましたが、正式には「嘆徳文」で、存覚上人が、延文四年即ち、親鸞聖人没後九十六年目に御書きになったものです。御忌「報恩講」に用いるため、覚如上人の「報恩講式」に倣って述作されたもので、いわば毎年一月十六日に、参詣の男女の前で、声高らかに、読み上げられることを予想して書かれたものと言えるでしょう。一月十六日は、一番寒い季節です。内陣には、特大の蠟燭に火がつけられ、参詣の方々には、或いは固くなった雪道を踏みしめ乍ら、或いは、吹雪に足をとられつつ、善巧寺迄、と云うより、親鸞聖人の御影の前迄、歩を運んだ方々です。

本堂の前は、大屋根から落ちた雪で山が出来ています。年によると、読経最中に、積雪がドツと落ちて、本堂を揺るがすような音を立てることもあります。まだ乾かないゴム長靴や、カッパが、廊下に置かれています。此の厳寒の季節に、毎年、宗祖の遺徳を偲ぶ御正忌報恩講が営まれると云うことは、宗祖親鸞聖人の九十年の御生涯にまことに相応しいことと思われまふ。

「しかればすなわち蓮花蔵世界

御正忌を迎えて

のうちにしていまの講肆を照見し、檀林宝座のうえより、この梵筵に影向したまふらん。」

私は、「嘆徳文」の此の條りを讀むたびに、善巧寺の一月十六日の御満座に御参詣の門徒の方々のお顔の一つ一つを思い浮べます。これを、現代語に訳すと次のようになります。

「おそらく聖人は西方浄土の宝座の上から、私たちのこの報恩講の法座を照見されつつ、ひとすじにおしたい申し上げている私たちのこのさよらかなつといを、おみまもりくださっているにちがいない。」(花岡大学訳)

今年も、皆様御揃いで、御参詣下さい。

◇◇◇◇◇

ところで、私、十一月十六日より、高血圧症のため、病臥、法務に就くことが出来ず、大変、御迷惑をかけて居ります。追ひ追ひ快方に向つてはいますが、まだ全治とは申せず、しばらく、静養をつづけないと思ひます。

近況、次の句に御想像下さい。

- 病む我に 人皆優し 組袍脱ぐ
 - 病室は 銀杏紅葉の薄明り
 - 水雨聞き 細き腰撫て 思うこと
 - 軽さもの 明るさもの 欲し 冬に病む
 - FMを 終日流し 冬日和
 - 妻作る 杖に 縛りて 冬の窓
 - 林檎三切れ 漸く食うて 吐息つく
 - 大銀杏樹 ほぼ散り終り 嵐去る
 - 手鏡に 戸外の 紅葉映しけり
 - 冬されや わが静脈の 色寂し
- 住職 雪山 俊之

の み あ と を し た い て

空
華
と



明教院
僧 銘 伝

明教院僧銘（そ
うよう）師のみあ
とをしたって、昨
秋、全国の浄土真
宗の学者様たちが、
浦山の善巧寺に、
墓参にこられました。

これは竜谷教学会の全国大会が
富山で開かれた折に、是非にとの
ことで立ち寄られたもので、桐溪
順忍、瓜生津両勧学をはじめ総勢
六十名のそうそうたる顔ぶれでし
た。
特に桐溪勧学は、僧銘師が開か
れた空華学派の流れを汲むだけに、



明教院の墓の前で。竜谷教学会の先生たち。

さて、全国の学者様方から、二
百年たつたいまでも、したわれる
僧銘師とは、どんな方だったのか
わがしたち門徒も、知
っておこうではないか、
というこで、十一月
七日からわたしたちは
「明教院のみあととし
て」の旅に出ました。
夜明け前の善巧寺を
出発して間もなく、水



生家、渡辺さん宅

ようこびもひとしおで「やつと明
教院の墓に参られた。昔はこのお墓
に参らないと空華の門弟ではない
といわれていただけに、うれし
かぎり」と大よろこびで「能所不
二心あらたに思いつつ、しづか
に遺墨を おろがみまつる」との
色紙を残し、お帰りになつてから
も「命のつづくかぎり、空華学派
の發揮につとめます」とのお便り
を下さいました。



住職が、
僧銘師
につい
てくわ
しくご
講義下
さいま
した。

橋・市江村の渡辺家へ到着。ここ
は僧銘師の生家です。わたしたち
はふる里へ帰つたような気持ちで
お仏さんにお参りいたしました。
「ようこそお越しでした。三年後
の二百回にはまた参らせていた
きます」と七十八才の彦作さん。
俊夫さん、キミコさん夫婦のあた
たかいもてなしに、心から感激い
たしました。
つづいては、僧銘師の修学の場
上市の明光寺。
こちらでは真宗史の学者である



勉学の地、上市の明光寺で

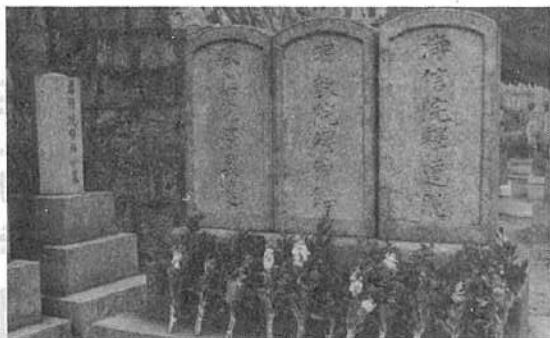
この寺の養子となつた十一才の僧銘
師が以後十年の間、家族同様に
育てられ、立派な学者になられたこ
と。そして、その僧銘師が開かれた
空華学校は、師がなくなつたあと
も越中全域にひろがつたこと。ま
た、善巧寺にある僧銘師の墓は、
じつは、明光寺の住職が、後にな
つて有志をあつめて十兩の金を借
りて建てられたもので、その時の
設計図や借金の証文がまだに残つ
ていたのにはみんなビックリでした。



墓建立の際の金十兩の証文

寺 によみ		二 月
一 日	お講 浦山	
二 日	三日市・報恩講	
三 日	うらやま日曜学校	
四 日	生地・報恩講	
五 日	お講 下立	
六 日	音沢・御助成	
七 日	下立・報恩講	
八 日		
九 日		
一〇 日		
一一 日		
一二 日		

明教院僧鎔師



大谷の勤学溪

僧鎔師が幾度となく参られたであろう吉崎御坊を経て、バスは一路、京都へ。

大谷本廟についたわたしたちは御堂に参拝したあと、手に手に花を持ち香を持ち、勤学谷へ。ここは、本山に功あつた勤学方ばかりのお墓のあるところで、明教院僧鎔師は、その正面中央に。右は道隠師、左は柔遠師。人はこの三師をさして、空華三轍と称しています。ついてながら、その左三師の一番近くにある墓は、若院の曾々父、利井鮮妙のもの。富山と大阪は遠いけれど、

学問の關係では一番近いわけですね。夜になつて、その若院の実家、大阪・高槻の常見寺に着きました。ここには、百年前から行信教校という学校があり、僧鎔師の空華学派の流れを汲んで、全国の若い僧侶が集まつて宗学にはげんでいます。

若栗の発願寺の若院、吉原の光明寺の若院の顔も見えます。朝のおつとめにはその若い僧侶たちが参集し、声高らかにおつとめをします。

わたしたちはそのご縁に会わせていただくと同時に、この日は昼まで、この寺の住職、利井明弘師の法話をいただきました。お話は「帰るところ」ということで「帰るところ」ということは、迎えてくれるものがある、迎えてくれるものがない、迎えてくれるものがない、迎えてくれるものがない。わたしたちは、本当に帰るところがあるのだろうか。本当に、いつも



常見寺全景



空華の流れを汲んで研鑽する行信教校

迎えてくれる人がいるのだろうか」という問いかけには「はじまり」「この世にあって、わたしたちはいずれ帰るところを失なわなければならないが、そういうわたしを、いつでも、どこでも、待

つていて下さるのが如来さまである」と、かみしめかみしめてお話し下さいました。そして最後に「みなさん、お寺参りして、かしくならないようにしましょうね。お聴聞はかしくなるためのものではありませんよ。あの妙好人才市さんがいわれるように、わたしたちにはツノがある。そのツノをお聴聞によって、細く、短かくけずってゆくのではない。聞けば聞く



新しい本堂のできた祐貞寺で婦人会の方達と



本山御影堂門前でハトと一緒に

ほど、わたしのツノがこんなにも太かった。こんなにも長かったと気付かせていただくのです。そして、そういうわたしだからこそ、救わずにはおかんと迎えて下さる如来様のお慈悲がよろこべるのです」と結ばれました。

わたしたちは深い感銘をうけつつ、常見寺をあとにして、僧鎔師が、善巧寺ともう一つ住職をされていたという、大阪・住吉区の祐貞寺へ出かけました。

大和川のそばのこの寺へつくと、なんと、御堂が建立されたばかり。これまでこの寺は勤学方の学問寺だったので、御堂も道場のようなものだったのですが、最近になって、この住職と門徒の方が一念発起、素晴らしい本堂を建てられたのだそうです。この寺は、僧鎔師の師匠であつた僧様師が初代の住職で、その師の遺言で、僧鎔師が二代目になられたのです。老坊主と婦人会の皆様のお世話になり昼下りのひとときを、あたたかく過ごさせていただきました。

この日はこのあと堺市内のお線香の工場や千利休ゆかりの寺などを見物して一泊。翌日は京都の映画村。

そして、最後に心のふるさと本願寺にお参りしました。大イチョウのまわりにハトが飛び交い、境内には菊の花が香ります。御影堂にぬかずくと、あちこちからお念仏の声：心あたたまる秋の開法旅行でありました。

善巧寺門徒年忌一覽

- (一週忌) 浦山久次(1・8)
新保久夫(1・10) 佐々木隆人(母)
1・24 新保良雄(母) 1・29
中林要作(2・4) 橋日出夫(母)
2・17 佐々木林(母) 2・18
大藏助雄(妻) 3・3 橋爪榮作
(3・31) 岩崎作郎(4・21) 鬼
原次郎助(妻) 4・26 中村慶一
(母) 5・2 島田久成(妻) 5・
8 島田博嗣(母) 7・18 新保
林作(母) 8・2 佐々木武和(母)
8・3 朝倉保(8・30) 丸田甚
吾(母) 10・20 大浦政男(長男
11・24) 們清吾(12・4)
(三週忌) 大藏字之助(1・16)
大藏義悦(2・7) 佐々木藤一(3・
16) 越後庄太郎(妻) 3・17 丸
田夫(3・27) 鬼原辰雄(5・3)
佐々木正雄(母) 5・12 谷川正
明(母) 5・28 谷川淺五郎(6・
13) 野村伊太郎(妻) 7・1 橋
松次(母) 7・3 們直次(7・7)
19 谷口五郎左門(娘) 7・26
橋早二郎(妻) 7・28 島田拾次
(妻) 8・4 中村幸作(8・9)
岡田清次郎(母) 8・13 沢田康平(9・
12) 橋弘(母) 10・3 浦沢益次
郎(10・15) 浦瀧善作(10・16)
高松昭春(母) 10・30 橋場豊治
(11・7) 高島彦丸(12・5) 新
保隆夫(母) 12・12 東孤与四正
(12・19) 佐々木清太郎(12・25)
(七週忌) 丸田梅吉(妻) 1・
5 橋常由(長男) 1・14 浦田
榮二(妻) 3・2 新保文次郎(3・
6) 中林勝次(3・16) 中村正行
(3・30) 浦沢一郎(母) 4・15
高島幸作(母) 5・15 大野清作
(妻) 6・2 野畑弘(祖母) 6・
14 森岡辰次郎(6・19) 丸田淺吾
(妻) 6・19 們清吾(母) 7・9
6 佐々木慧(妻) 7・9 森岡
重太郎(7・10) 川内政男(長女
7・13) 佐々木弥左門(娘) 7・
20 新保良造(8・23) 福沢作二
郎(9・21) 佐々木鉄男(母) 10・
12 佐々木九兵衛(母) 10・22
佐々木清太郎(妻) 11・19 新保吉
次郎(12・15) 佐々木仁太(12・
16) 川瀬恭一(母) 12・23
(十三週忌) 橋場宇之(1・18)
鬼原吉造(母) 1・28 森岡榮一
(父) 1・31 松平源治(父) 2・
11 大野長作(2・20) 佐々木石
松(息子) 3・1 根塚實市(母)
3・13 橋早二郎(3・29) 佐々
木市太郎(3・28) 岩上正朝(4・
1) 中村与四松(母) 5・3 丸
田忠正(5・9) 佐々木直正(5・
18) 大島吉郎(5・18) 谷川彦平
(妻) 8・12 鬼原吉造(父) 8・
16 高島石次郎(9・20) 板川吉
次郎(妻) 9・23 田中静治(母)
10・4 島田淺次郎(妻) 10・11
岡田助次郎(10・17) 野崎吉郎(母)
10・21 西田由広(11・19) 佐々
木作松(孫) 11・27 新保政一(母)
12・2 鬼原男(父) 12・11 沢
田長作(12・26)
(十七週忌) 佐藤宗一(母) 1・
30 開沢助三郎(母) 2・1 沢
田米作(母) 2・14 鬼原榮次郎
(2・16) 佐々木清三郎(母) 2・
22 中村嘉太郎(母) 3・28 佐
々木九郎作(妻) 4・4 山根作
二(5・15) 川内宅次郎(5・18)
岩上貞男(父) 6・4 上野実(7・
20) 中坂宗作(妻) 7・21 尾村
清次郎(7・24) 川口由市(母)
9・17 板川進(父) 10・2 川
内昭一(10・12) 山下義次(10・
19) 野崎新作(母) 11・3 浦田
明広(11・9) 東孤幸一(父) 12・
2
(二十三週忌) 野崎吉左門
(2・1) 板倉正一(2・9) 佐々
木文作(2・16) 佐々木新四郎(孫)
3・10 森岡昭二(長女) 4・4
浦瀧忠次郎(妻) 4・8 藤沢義
雄(妹) 4・14 川内榮造(母)
5・8 佐々木文一(妻) 5・12
佐々木助一(父) 5・16 佐々木
寛(妻) 5・26 河村鉄造(長女)
5・30 浦瀧善作(父) 6・2
谷川石次郎(6・12) 沢田幸平(6・
21) 川瀬良作(6・26) 飛彈源右
エ門(母) 7・3 鬼原長作(7・7)
3 佐々木直正(7・4) 佐々木
甚之助(妻) 8・11 浦瀧甚一(父)
8・21 丸田梅次郎(妻) 9・9
山本清吉(9・10) 浦瀧善造(次
男) 9・27 川内善七(10・15)
島田春次郎(11・3) 川口九郎兵
衛(主) 11・6 長沢義雄(母)
11・18 開沢良造(12・5) 谷川
和十郎(娘) 12・11 川内次郎七
(主) 12・12 板川市郎右門(妻)
12・17 浦山幸作(12・31)
(二十七週忌) 川口利助(妻)
1・13 沢田峰吉(1・29) 谷口
小三郎(母) 1・27 高島彦助(母)
2・3 佐々木武(2・7) 大島
幸助(2・7) 西中市左門(孫)
2・20 沢田五十郎(2・20) 野
畑市右エ門(孫) 3・5 鬼原信
義(父) 4・1 山本秀雄(長男)
4・3 佐々木菊正(弟) 4・6
板川幸作(4・20) 松平源治(祖
母) 4・27 開沢安次郎(父) 5・
12 川内善七(母) 5・21 岩上
貞男(三男) 5・30 丸田次郎助
(長男) 6・2 浦田甚作(兄)
6・18 山根淺二(長女) 7・10
佐々木勝次郎(7・17) 浦山久次
(母) 7・18 佐々木次郎七(7・
31) 岡田良作(8・9) 柳田雅巳
(8・13) 本波實一(母) 8・19
島田周一(長男) 8・25 開沢庄
作(三女) 10・1 熊野捨昇(父)
10・7 岩上貞男(次男) 10・10
中林市(妻) 10・15 尾沢初雄(父)
10・18 佐々木清六(10・20) 佐
々木貞次郎(父) 11・1 尾村佐
右エ門(長男) 11・12 本波源吉
(母) 11・16 佐々木茂(11・20)
大浦猪次郎(孫) 12・11 岡田長
作(長男) 12・11 高松義啓(妻)
12・30
(三十三週忌) 橋早一郎(孫)
1・1 佐々木金一(1・11) 菊
地助次郎(1・13) 新保伝左門
(孫) 1・20 板川得雄(妻) 1・
25 久田新作(弟) 1・11 浦瀧
伝左エ門(母) 2・26 島田宇左
エ門(3・2) 橋用次郎(孫) 3・
6 佐々木太郎吉(長男) 3・17
佐々木宇實(3・21) 野崎榮次郎
(3・26) 東孤嘉三郎(3・29)
本波喜一(長女) 3・30 上野忠
次郎(4・15) 橋新作(次男) 4・
22 佐々木基六(孫) 4・29 大
浦竹次郎(次男) 5・17 朝倉竹
次郎(妻) 5・17 川内次郎(孫)
5・23 川内治七(6・1) 佐々
木新四郎(母) 6・2 佐々木八
十八(孫) 5・3 根塚義男(妻)
6・14 谷川忠三(娘) 6・20
長沢又吉(長女) 6・25 岡田岩
次郎(五男) 7・5 丸田久助(次
男) 7・23 島田元吉(母) 7・
25 野畑孫作(8・3) 佐々木仁
太一(長女) 8・9 佐々木木次
(次男) 8・9 中林久吉(母)
8・16 丸田忠正(父) 8・16
佐々木与作(六女) 8・26 橋沢
良造(母) 8・28 佐々木文一(三
男) 9・4 佐藤宗吉(母) 9・
19 佐々木入次(長男) 9・24
野村耕作(9・29) 清水久一(父)
10・3 根塚仁太郎(10・11) 本
波連二(長女) 10・12 島田伊平
(母) 10・17 菊地整(母) 10・
21 川内繁松(三女) 11・5 岩
上淺次(子) 11・8 菊地良造(次
女) 11・10 本波久作(妻) 11・
14 佐々木次夫(祖母) 11・24
福沢順七(次女) 11・26 中村三
次郎(11・30) 佐々木半左門(妻)
12・3 新保三郎(母) 12・5
川瀬清作(12・12) 尾沢与次郎(12・
14) 佐々木弥三太郎(長男) 12・
23 野崎正次(三男) 12・29
(五十週忌) 根塚仁太郎(孫)
1・5 本波幸次郎(1・16) 大
藏長造(四男) 1・22 佐々木外
一(長女) 1・24 開沢安次郎(孫)
2・10 鬼原辰右(門) 孫) 2・
16 佐々木貞次郎(孫) 2・19
橋場兵造(2・23) 板倉外次郎(母)
開沢彦左門(四女) 3・18 川
内善四郎(次男) 3・29 佐々木
金三郎(孫) 4・4 福沢竹次郎
(4・7) 們石次郎(4・19) 佐
々木基六(孫) 4・29 田中三太
郎(母) 5・2 橋靖(母) 5・3
3 新保竹次郎(三男) 5・3
尾沢次郎右門(5・9) 上坂伊
平(次女) 5・18 森長兵衛(母)
5・20 板倉長吉(6・1) 谷口
源次郎(妻) 6・18 佐々木宗九
郎(妻) 6・18 鬼原長助(7・7)
6 野崎与五郎(孫) 7・7 佐
々木勝次郎(三男) 7・14 山本
彦三郎(三男) 7・17 浦瀧善作
(三男) 7・20 鬼原六松(二女)
7・23 長沢定次郎(母) 7・25
大藏助十郎(六男) 7・27 川内
次郎七(長男) 8・1 鬼原要造
(8・8) 鬼原次作(次女) 8・
13 鬼原辰次郎(六男) 8・29
佐々木次郎兵衛(妻) 8・30 上
坂利助(孫) 9・12 丸田清次郎
(9・23) 丸田喜右門(三男)
9・25 丸田正(長女) 9・27
板倉長次郎(妻) 10・11 高島定
次郎(長男) 10・12 谷口清太郎
(妻) 10・17 沢田五十郎(弟)
10・21 島田方員(孫) 10・21
中林市三郎(10・22) 開沢彦左
門(三女) 10・29 佐々木清太郎
(四男) 10・31 佐々木光男(四
男) 10・31 根塚長吉(11・9)
川口清太郎(長男) 11・10 田中
平四郎(孫) 11・12 船屋幸助(三
男) 11・18 川瀬儀友(次男) 11・
19 佐々木清九郎(祖母) 11・21
島田次平(母) 11・28 本波次左
エ門(孫) 12・1 中村吉兵衛(12・
26) 大藏助十郎(12・29)
(百週忌) 鳴田七郎右門(三
男) 1・9 鳴田次平(主) 1・
15 野村權右門(妻) 1・25
山片平六(妻) 2・6 清水伊三
郎(次男) 3・7 川内七郎左
門(妻) 3・15 浦沢仁四郎(主)
4・1 岩上太兵衛(妻) 4・23
大島和右門(主) 5・5 橋爪
伊左門(父) 5・30 沢田五郎
助(妻) 6・9 佐々木金三郎(妻)
6・17 岩上吉兵衛(主) 6・17
山片淺左門(三男) 6・18 上
坂利平(妻) 7・14 野村五郎七
(父) 7・12 佐々木清右門(主)
7・16 佐々木次郎吉(主) 7・
24 山本忠左門(母) 7・29 開
沢右エ門(妻) 8・1 板倉八
(長男) 8・20 丸田次郎八(三
女) 8・23 川内善次郎(父) 8・
25 佐々木七郎右門(妻) 8・
26 野村四郎左門(妻) 8・26
佐々木善右門(妻) 8・27 佐
々木四郎次郎(妻) 8・27 川内
与三左門(母) 8・31 丸田佐
五右門(三男) 9・8 上野五
郎兵衛(妹) 9・14 新保藤次郎
(長男) 9・19 丸田六右門(次
男) 9・22 橋場兵四郎(父) 9・
27 朝倉淺右門(父) 10・10
佐々木宗三郎(次女) 10・16 大
藏助十郎(主) 10・17 谷川六左
エ門(父) 10・18 橋本彦三郎(次
男) 11・7 佐々木作兵衛(三女)
11・17 鳴田文三郎(長男) 11・
17 鳴田宇左門(妻) 12・17
野村四郎左門(主) 12・20



三法要記念の建設事業が完成しました。門徒集会所、お内仏の間、明教院文庫「甘露室」。そして、奥の座敷「空華殿」。使い初めはさる十月十九、

庫裡完成



田秀栄師の布教。夜は照行寺、法輪寺の二方による御伝鈔。

報恩講

満座の二十日は、三百五十人ほどのお参りだったでしょう。御堂も庫裡も満員の盛況。利井興弘師（若院の父）の満座布教は「如来とは真如より来して、わたしに直接して働きかけて下さるもの」との熱のこもったお話でした。

前住三十三回忌

午後からは寺方総勢十六名による前住三十三回忌法要「無量寿経作法」導師は荻生・称名寺住職。



つづく記念講演は、京都大学名誉教授、井上智勇博士。ヨーロッパの歴史を学問される博士が、親鸞聖人にひかれ、念仏もうす身になれるまでの体験を通してのお話は心打つものがありました。

寺

三月

十一月九日 曇、小雨、時々薄日、昨日、夜なべして、拂曉漸く寝につく。十数年来、北日本文学賞の予選選者を委託されて、三百数篇の作品を読む仕事を仰せつかり、人の寝静まった秋の夜を、例年、原稿読みに多忙な時間を割く。それでも、これで、四十年前以前は、文学青年のはしくれたりし頃あり、結構楽しみながら、原稿用紙をめくっている。

十時頃、電話の音に目を覚ます。北日本新聞より、「御存知かも知れませんが、佐々木大樹先生が亡くなりました。早速ですが、原稿八百字御願います。何分明朝の新聞に載せねばならず、原稿を取りにお伺いしよう。



住職日記

残りもの。息子たち、孫たちが、三十数名の一行と共に、開法旅行に出掛っている。久しぶりの夫婦向いあつての食卓である。今日は、若葉発願寺の報恩講満座。これも、久しぶりの電車にて行く。浦山駅から眺める近くの山々は、今が、雑木紅葉の盛り。振り返ると、善巧寺の銀杏紅葉も、本堂の屋根を背景に、薄日に映えている。一時半より法要。例により住職は、声を張り上げて、巻物の式文を読み上げる。お仲間の間でも、大樹翁逝去の話が出る。特に、荻生称名寺には、戦時中、永らく疎開生活を送ったとの事で、酒好き

(完)

二〇日 三法要理事会
二五日 日曜学校卒業式

一八日 春の開法バス旅行

一六日 お講・析沢

一八日 春の開法バス旅行
一六日 お講・析沢
一五日 聖徳太子の祥月命日を一カ月くり上げて行います。太子講関係の方、是非お越し下さい。会費は三千円です。

四日 泊・入善報恩講

三日 舟見報恩講

二日 析沢・熊野報恩講

一日 お講 浦山

五日 うらやま日曜学校

四日 泊・入善報恩講

三日 舟見報恩講

二日 析沢・熊野報恩講

一日 お講 浦山

五日 うらやま日曜学校

四日 泊・入善報恩講

三日 舟見報恩講

二日 析沢・熊野報恩講

一日 お講 浦山

五日 うらやま日曜学校

四日 泊・入善報恩講

三日 舟見報恩講

二日 析沢・熊野報恩講

一日 お講 浦山

五日 うらやま日曜学校

四日 泊・入善報恩講

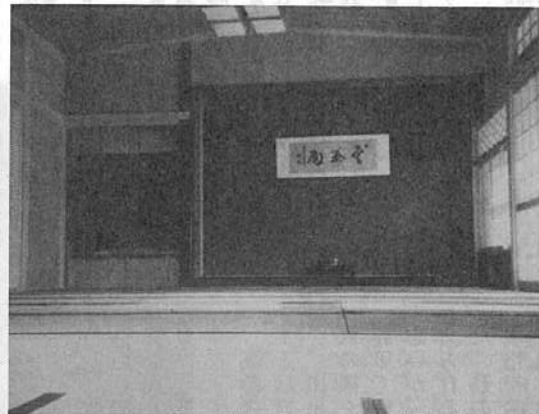
三日 舟見報恩講

二日 析沢・熊野報恩講

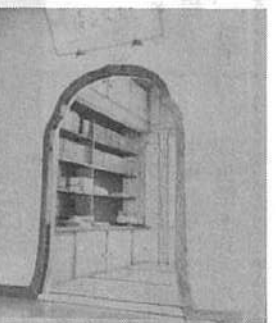
一日 お講 浦山

三法要建設事業完成

善巧寺の三法要（五十七年）記念の建設事業が、おかげさまで昨年末、ようやく完成いたしました。写真でご覧のように、奥座敷は従来の上段のご

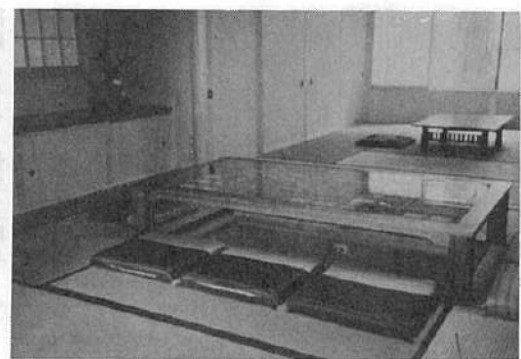


殿のおもかけを生かした大広間で「空華殿」と名付けます。お坊さん方の結果の他、仏前結婚式の披露などにもご利用いただけます。畳数は上段が十八帖、さやの間が十四帖。



どが書写本の復写です。現在で僧侶の著されたものの八割ほどがあつまりましたので、あとひと息といったところです。

玄關をはいったところには「門信徒集会所」があります。ジャンボなやぐらコタツがあるところが十帖。その隣りがお内仏の間で十二帖半。ふすまをはずすと、冬の間の法座も催すことができるようになります。門信徒の皆さん、これらは、すべて、あなたのお部



屋です。せいぜいご利用下さい。お待ちしております。

ひと口お作法

仏参の心得

◎：わたしたちは仏教徒です。ですから仏様の前にすわらせていただくときは、うやまいの気持ちとみずからをかえりみて、心を正してゆかねばなりません。そのためにも、形にあらわして、おじゆずを両手にかけて、合掌、礼拝をキチンとしましょう。これが礼儀です。

◎：ところで、仏参の心得は、合掌と礼拝だけでよいのでしょうか。わたしたちは親鸞聖人を宗祖と仰ぐ浄土真宗の門徒です。こと

◎：最近、法事やおつとめの際にお念仏の音があまり聞こえなくなっています。お念仏は自分がかみしめるものだから、という人もいますが、お念仏は音声法といわれまふ。声に出してはじめて、自他ともにみ仏の心をいつそう深く聴聞することになるのです。

仏参は合掌—念仏—礼拝と心得ましょう。

婦人倶楽部 結成へ

善巧寺では、門信徒の若婦人の親睦の場として、今年から、新しく出来た集会場を開放して「善巧寺婦人倶楽部（仮称）」を発足いたします。

この倶楽部は、下新川一帯にひろがる善巧寺の門信徒の婦人層を対象に、お互いに助けあつて、心の輪を広げてゆこうというもので、最近問題になっている子供の家庭教育の問題、夫婦のあり方などを話し合うとともに、その根本ともいえる人生の問題を、仏教を通じて考え直してゆきたいと思っております。

具体的な計画は、有志、世話人の方が集まり次第検討してゆくわけですが、まずは「わかりやすい仏教講座」やさしい仏事の作法「おつとめの練習会」さらには「お料理講習会」など趣味の会を合わせます。

門徒の奥様方、日曜学校に子供を出しているお母さんたちの中で倶楽部の一員になって勉強してみようと思われ方は、別紙の入会カードにご記入のうえ、一月十五日までにお申し込み下さい。

第一回の会合は追ってお知らせします。

有志 世話人募集中

合 掌

△昨年の善巧寺十大ニュース△

- ①建設事業の完成 これまで寺の活動も本格的にエンジン始動！
- ②前住職三十三回忌（10・20）りっぱに勤めさせていただきました。
- ③竜谷教学会来院 明教院のお墓参りに勸学様らが六十人も。
- ④春・秋開法旅行 とくに秋は明教院をしのぶ旅。エカッタヤ
- ⑤日曜学校活躍 夏にはソフトボール富山大会優勝。おつとめも自分たちで出来るようになりました。
- ⑥野休み落語会（6・10）超一流の落語会と、江戸でも評判でした。
- ⑦花の初まりり（4・30）二回目を迎え、チューリップも二万個！
- ⑧にぎやか盆踊り（8・15）夢を語る会の皆さん今年もよろしく。
- ⑨初の子太会（3・11）門徒の建設関係者が全員集合！
- ⑩お講年々記録破り お参りがどんどんふえて喜ばしい悲鳴

△昨年とは本年にお世話になりました。そして、本年もまた、皆様と共に、よろこびの日々を送らせていただくのではないですか。

